

知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第15回】

坪井祐司(つばい・ゆうじ)

立教大学等非常勤講師

ハジ・アブドゥッラー・フクムとクアラルンプール

現在クアラルンプール(KL)で最も急速に開発が進められている地域の一つがLRT(軽便高架鉄道)で中心部からプタリンジャヤ(PJ)方向に向かう途中のバンサ、アブドゥッラー・フクム、クリンチといった駅の周辺であろう。本稿では、駅名にあるハジ・アブドゥッラー・フクムという人物を紹介することとしたい。

アブドゥッラー・フクムはKLの開拓者の一人である。スマトラ島中部の山岳地帯クリンチ地方の出身で、彼の回想によれば1850年に15歳の時にマレー半島にやってきた。マレー半島は歴史を通じてマラッカ海峡経由でスマトラをはじめとする現在のインドネシアの島々から移民を多く受け入れており、彼もまたその一人であった。

英保護領下で都市の下地作る マレー人移民商人としても活躍

アブドゥッラー・フクムはマレー半島のマラッカ港に上陸し、布の行商をしながら陸路KLへと入ると、錫の採掘を行った。KLは、19世紀中葉以降、錫の採掘拠点として発展した新しい街である。当時のKLの中心は、現在のセントラル・マーケットからトゥン・ペラ通りに至るクラン川沿いのごく狭い地域に限られていた。19世紀末のKLの人口は約2万人であったが、うち7割以上が華人であり、その多くが錫採掘の労働者であった。人口の1割強のマレー人の多くもまたスマトラからの移民であり、KLは人口の8割が男性という極端な移民社会であった。

華人、マレー人入り乱れての内戦を経て、1874年KL周辺はイギリスの保護領となる。アブドゥッラー・フクムは現地のマレー人王族や英国人行政官の許可を得て現在のブドゥ、ブキ・ピンタン、ブキ・ナナス、バンサといった地域の開発を行った。現在の繁華街に当たるこれらの地域は、コーヒー、胡椒などが栽培される農業地として始まった。

彼は同時に商人でもあった。船を所有し、クランと

KLの間のコメの貿易に従事するかたわら、内陸のパハンの間の牛の貿易に従事した。状況に応じて、彼は小規模ながら鉱業、農業、商業などミッドバレーには、大型ショッピングセンターなどが立ち並び



けていた。初期のKLは、華人ばかりでなく、こうした小回りのきくマレー人移民の経済活動にも支えられていた。

KLの都市としての拡大が本格化したのは20世紀に入ってからである。現在のメルデカ広場周辺の原型ができたのが1900年代であった。同じ頃ゴム・ブームが起こり、ブキ・ピンタンやバンサにはヨーロッパ人の農園が進出した。その一方で、アブドゥッラー・フクムは自身が開いたバンサ地区の村長となり、植民地行政のなかでマレー人の代表者となった。彼はスランゴルやパハンの宮廷でも地位の公認を受け、移民ながらマレー人社会で確固たる地位を築いた。彼の人生からは、KLにおけるマレー人という集団のあり方や、その時々における役割をうかがうことができる。

急速に変貌するKLで歴史の痕跡を探すのは難しい。実際、最初に挙げた駅名の起源となったカンボンも開発の波に飲み込まれつつある。しかし、これらの地名はKLの歴史のなかであまり光の当たらない一面を映し出すものといえよう。

【執筆者プロフィール】1974年東京都生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修了。博士(文学)。現在は立教大学等非常勤講師。専門はマレーシア近代史(英国領マラヤ)。19世紀末~20世紀前半のスランゴル州の植民地行政を通じて、マレー人という集団の形成過程を研究している。